

## 2014年度地域研究コンソーシアム(JCAS)次世代ワークショップ 「アフリカにおける障害と開発」

開催日：2014/10/31（金）15:00～16:30

開催場所：JETROアジア経済研究所

企画責任者：森 壮也

（JETROアジア経済研究所開発研究センター主任調査研究員）

報告者：姜 明江氏（京都大学アフリカ地域研究資料センター）

タイトル：「アフリカにおけるハンセン病者の生活と社会関係の再構築  
-障害と開発の視点から」

参加者：30名程度

アジア経済研究所（以下アジ研）において「障害と開発」プロジェクトを率いている森壮也主任調査研究員の司会の下、進められた報告では、(1)ザンビアの植民地行政の時代から、ポスト植民地行政の変遷の中でのハンセン病対策の変遷 (2)その中で生まれたハンセン病回復者の村、ウモヨ村の形成とその村人の語りの研究 (3)村人の村落内の生活や社会関係の現状とその分析が報告された。

### 主旨：

ハンセン病の歴史的変遷は、植民地期以前、植民地期、ポスト植民地期の三期からなり、その間に医療パラダイムも伝統医療から、宣教医療、外来診療と変わり、地域社会からの反応も規制や排除から交流/統合へと変化、また当事者たちも地域慣習に従うだけの生活から、隔離政策への従属を経て、自立した共同体を運営するまでに至っているという変化に注目した分析であった。さらに当事者同士のつながりも当初は希薄あるいは無い状態だったものが、キリスト教信仰を媒介とした共同生活をへて、現在の生計/生存のための実践に基づいたつながりへと変化している。すなわち、当初は病者の共同体だったものが、いわゆる障害者の自助団体とも異なる、「生計」や「生存」を基盤とする共同体という独自の存在へと発展していることが見て取れる。ただ、それゆえの互助のネットワークの脆弱性や、外部の共同体やコミュニティ・ヘルスワーカーとの関係構築などの課題は残っていると言えるという報告もされた。

### 質疑応答：

薬の誤用があるという指摘に対し、村民の教育状況に問題はないのかという点、自然村としてのウモヨ村と行政村との関係、外部社会とのつながりの形成で言う外部とは何か、差別が現在も残っているのかどうかという社会学的な観点からの質問、またいわゆる疾病者の自助団体とは異なる側面等についての興味深く、意義ある議論が交わされた。

「障害と開発」という新しい分野での取り組みであるが、社会関係の分析など、より社会科学的な分析手法が必要な側面もあきらかになり、今後のこの分野の発展にも貢献できる議論が行われたと思う。開催にあたってご協力頂いた各方面の皆様にご礼申し上げます。

